

Newsletter for JADR



I. IADRの国際活動の促進強化

JADR会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

IADR活動の主要な目的の一つに国際的な歯学研究の高揚があげられますが、先のCouncil Meetingでは「IADRの組織をIADR Global, IADR Region (Asia/Pacific, Africa/Me, European, Latin Am, North Am)とし、現在のFederationをRegionに発展的に再編成する」提案が行われました。現在のIADRの地域的(国別または地域別)組織は21のDivision (50名以上の会員)と12のSection (10~50名の会員)から構成されておりますが、更に4つのFederation (Africa Middle East, Latin American, PanAsian Pacific, PanEuropean)に編成されております。しかし、このFederationとIADR本部との組織的・財政的な繋がりが弱く、国際的な活動を促進強化するには組織的な再編が有効と考えられることが理由の一つです。

JADRはPan Asian Pacific Federationに参加しておりますが、このFederationでの活動も暗中模索的で容易ではありません。新たな機構改変によって国際的な活動が促進されることを期待しております。

2nd Meeting of the PAPFは2009年に中国で開催

前述のPAPFの活動を発展させるために、昨年のブリスベンでの第1回PAPF大会に続いて第2回学術大会の計画が検討されておりましたが、この度PAPF (Pan Asian Pacific Federation)の役員会がJapanese Division, Australian/New Zealand Division, Chinese Division, Korean Division, Southeast Asian Divisionの各会長の出席の下にニューオーリンズで開催され、2nd Meeting of the Pan-Asian-Pacific Federationは下記の要領でChinese divisionが第9回Annual Meetingと併催でPAPF meetingをホストすることが決定されました。

会 期：2009年9月22日(火)~24日(木)

場 所：Wuhan science & Technology Conference and Exhibition Center, Wuhan, China

各Divisionは毎年1回学術大会を開催しておりますが、この2009年大会に併催して第57回 JADR学術大会を行い、PAPF内の連携を促進強化したいと考えております。

奥田克爾先生がIADR Vice-president (2008-2009)の候補に

先般のIADR Council MeetingではIADR Vice-president (2008-2009)の候補として Katsuji Okuda (Japan), P. Mark Bartold (Australia), Maria Fidela de Lima Navarro (Brazil)の3名の候補者が選考され、本年の投票に付されることになりました。

IADR元会長の黒田先生の任期終了の挨拶が本号に掲載されておりますが、日本の研究レベルの高さが国際的に認知される上でも、IADR本部役員をJADRから送り出すことは有効と考えます。作田守先生、黒田敬之先生に続いてJADRから3人目のIADR会長が選出されることを切に期待しております。会員の先生方のご支援をお願いします。

JADR総会・学術大会への大勢の参加を

第55回JADR総会・学術大会が近づいてきました。昨年は84th General Session & Exhibition of the IADRと1st Meeting of the Pan-Asian-Pacific Federationがブリスベンで開催されたため第54回JADR総会・学術大会も併催となり、国内での大会は2005年の岡山大会(山本照子大会長)以来となります。JADRはIADRのDivisionとして国内外の歯学研究の発展と日本の研究者の国際的な活動の足掛かりになればと思っております。今回は、これまでの大会で実施してきた「Hatton Awardの国内発表会」、「IADR韓国部会との相互交流」、「学術奨励賞選考」に加えて、PAPFの各Divisionからの若手研究者を対象としたTravel Awardが新設されました。このTravel Awardは「この様な活動を通じてアジア諸国との関係を深め、JADRがAsiaのHub divisionとして機能を果たす一助となる。」ことを目的として新設されたものです。

大会長の前田先生の発案で「口腔と全身の健康を守るための新戦略」をメインテーマとして開催される本大会の詳細は後の頁に掲載されておりますが、IADR会長のDr. Deborah Greenspan先生をはじめ、アメリカ、ドイツ、オーストラリア、韓国および台湾からトップレベルの研究者を招聘し、盛り沢山の企画が組まれております。会員の先生方の多数の参加をお願いいたします。

II. IADR本部役員の任期を終えて

黒田 敬之

(IADR元会長, JADR名誉会員, 東京医科歯科大学名誉教授)

2007年3月24日, New OrleansでのIADR総会終了時点で, 4年余にわたった本部役員の務めを無事終えることができました。これもひとえに, JADR会員の皆様方の温かいご支援の賜物と心から感謝いたします。とくに昨年のBrisbaneの総会は, JADRはじめPAPFの絶大なご協力のもとに成功裡におさめることが出来ました。本当に有難うございました。正直言って, 今は, ほっと一息ついているところです。

思い起こしますと, 1995年のシンガポールでのIADR総会のCouncil MeetingにJADR副会長として出席しましたが, IADR本部会議への初参加でした。以降, 間に1年だけブランクがありました, Member at-Large (Regional Board Member設置以前におかれていた)の任期を挟み今年3月まで, 約12年間関与してきたこととなります。1996年から2000年までの本部役員を務められた大阪大学名誉教授作田守先生が2002年のNews letter for JADR 2号に書いていらっしゃるようですが, 私もIADRのBoard Meetingに出て, 当初, 大変戸惑いを感じました。会議の進め方, 予算の組み方, 会の資産運用など日本で経験していたやり方とまったく異なっていたからです。

IADR本部の紹介, 組織, 活動内容などについては先に挙げた2002年Newsletter 2号で作田先生が詳しく述べていらっしゃいますので重複は避けさせていただきますが, 2002年当時からみて, ここ数年で, 変わった点だけをあげてみますと, 次のような点だと思えます。

- 1) 組織・・・(i) European, Africa / Middle East, Pan Asian Pacific, South America, North America の5 Federationが設置され, それぞれから一人ずつRegional Board Memberが選出されている。(以前の3人のMember-at-largeの代わり)。FederationとRegionとの関係が不明瞭であるという意見もあり, 現在, FederationとRegionについて再検討されている。
 - (ii) 21Division, 13 Section (Uruguayan, Mongolian SectionがNew OrleansのCouncil Meetingで承認された)で構成されている。
 - (iii) 21のResearch Group, Institutional Memberから一人ずつ代表がCouncil meetingに出席する。
 - (iv) JDRのEditor, Regional Board Member, Executive DirectorにはCouncil meetingでの議決権はないが, Research Group, Institutional Memberの代表者にはある。
 - (v) Deputy Executive Directorを任命しないことにした。
- 2) 会費・・・2005年まで行っていた, Boardで承認したDivisionに対する会費補助の制度 (Member Subsidy Program)の代

わりに, World Bankで発表している世界の国々の平均年収表(毎年7月に更新される)で Lower Middle Income or below 国在住者 US \$ 40 Upper Income 国在住者 US \$ 50 High Income 国在住者 US \$ 80の段階式会費制にした。

- 3) 雑誌・・・Journal of Dental ResearchとCritical Reviews in Oral Biology & Medicineとが, 合本された。また, JDRはOn-lineで投稿出来, かつ, 読むことができるようになった。現在のImpact factorは, 2006年の最新情報では, 3.475となって歯科分野では最も高い。

New Orleansの学会の後に, 2つのTask Force Committeeが発足して, 一つは, 学会の開催時期の検討, もう一つは, RegionのGovernance, RegionのActivitiesの昂揚などについて検討が始まっている。

さて, 私が, 本部役員の間に変なもどかしさを感じたことの一つに, IADRが募集しているいろいろなAwardsへの応募が, 日本から極めて少ないということでした。日本の歯学の研究のレベルの高さについては, 海外でも高く評価されているにもかかわらず, 各賞の受賞という形になって表に出てこないということは大変残念に思えました。この理由の一つにAwardの内容, 応募方法, Award自体の存在が日本で十分周知されていないためかも知れないと考えられます。最近の研究者は, Internetを活用して, 新しい情報を簡単に得ることが出来るようになってはいるのですが, 学会のホームページを開いて学会発表の要項を読むことはあっても, なかなかそれ以外の検索をしてみることは少ないのかもしれませんが。そこで, この機会にIADRの各種Award等について, 名前だけでも紹介しておこうと考えた次第です。もし興味をもたれる方がありましたら, <http://www.iadr.org/> からAward & Fellowshipの項にリンクしていただければ, 個々のAwardの詳細な情報を入手できます。以下は, 2008年Toronto総会に向けての案内から抽出しました。

Fellowship

- 1) David B. Scott Fellowship
歯科大学, 歯学部学生を対象として, 毎年, IADRのDivisionから順番に応募できる。今年2008年はChinese Division, 昨年はBritish Divisionであった。US \$ 2,500
- 2) John Gray Fellowship
隔年に, Undergraduate, Post-graduate studentの歯学または関連した研究のtrainingのためのFellowship US \$ 10,000
- 3) John Clarkson Fellowship
Health service research, Epidemiology, Prevention, Diagnostics, Health promotionに関連する研究者 (DDS, PhD, Ms取得者)。US \$ 15,000 以内
- 4) Norton M. Ross fellowship
隔年に順番に各Divisionから選出。US \$ 2,800

5) Toshio Nakao Fellowship

Dental Material分野のYoung researcher (学位取得後5年以内)を対象とする。自分の母体である施設と異なった施設で6か月以内の滞在をして研究する。隔年で応募。US \$ 15,000 以内

Competition

1) IADR/Unilever Hatton Award Competition

これはみなさんよくご存じだと思います。応募資格, カテゴリーなどに注意されて, Divisionに割り振られた応募者数をDivisionで選出する。各カテゴリー 1位 US \$ 1,000, 2位 US \$ 500

2) IADR/Unilever Oral Care Division Travel Awards

Hatton AwardのCompetitionに参加する人の旅費援助。総額 US \$ 30,000 最小(1人) US \$ 1,200, 1人増えるごとにUS \$ 800

Awards

1) Colgate Research in Prevention Travel Awards

Young investigator (5年目までのPost Doctoral Researcherを含む)対象。Preventive Componentに関する研究。毎年, 6人選出する。North America, South America, Europe, Africa, Asia (Middle-East), Australia/New Zealandの地域を考慮される。US \$ 2,000

2) Distinguished Service Award

IADRのメンバーで長くIADRの発展に貢献した方で, IADRのOfficerにはならなかった方。Awardを受賞するGeneral Sessionへの参加費用(旅費含む)とPlaque。

3) Distinguished Scientist Awards

IADRのメンバー二人からの推薦。Committee ChairとSub-Committee Chair (以前の受賞者)により審議される。もし選ばれなくても5年間は候補者としてリストの中に残される。US \$ 2,000 とPlaque。

以下のように各Research Groupに対応したAwardsとなっている。Isaac Shour Memorial Award, Behavioral Science and Health Services Research Award, Basic Research in Biological Mineralization Award, Craniofacial Biology Research Award, H. Trendley Dean Memorial Award, Research in Dental Caries Award, Oral Medicine & Pathology Research Award, Award in Geriatric Oral Research, Research in Oral Biology, Basic Research in Periodontal Disease Award, Pharmacology/Therapeutics/Toxicology Research Award, Research in Prosthodontics and Implants Award, Pulp Biology Research Award, Salivary Research Award, Wilmer Souder Award, Young investigator Award (このYoung Investigator Awardだけは応募時40歳以下であること。)

4) E.W. Borrow Memorial Award

子供のOral Health Promotionに寄与する研究。US \$ 2,000

5) GlaxoSmithKlein Innovation in Oral Care Awards

口腔健康科学の発展に寄与する開発的な優れた研究プロジェクトに対して年にUS \$ 75,000を2年にわたって援助する。主研究者の他に共同研究者が必要。

6) Lion Dental Research Award

Behavioral Science and Health Service, Microbiology/Immunology, Cariology, Periodontal Research, Oral Health Research, Salivary Researchの6 Research Groupから3 Groupが交代で毎年推薦できる。DDS取得者でPostdoctoral degreeの研究をしているYoung researcherが対象となる。それぞれUS \$ 2,000

7) Regional Development Program

IADR BoardのStrategic Planから生まれたもので, Developing regionの研究を推進する目的をもって, 各Division, Sectionから推薦できる。応募されたプロジェクトをRDP Committeeで検討され, その年に許容しうる予算枠内で採否案を決め, Board Meetingで決定される。ここ2~3年は, 約US \$ 40,000が予算としてあらかじめ計上されている。

IADR Division Award

Central European Divisionには, Robert Frank Award, CED Travel Stipend Award という二つのAwardが設けられている。JADRにもJADR奨励賞が最近設けられているのと同じである。

IADR Research Group Award

各Research Groupで独自に設けている以下のようなAwardがあり, それぞれ, 各GroupのBusiness Meetingにおいて表彰されるようになっている。

1) Anthony Rizzo Award

Periodontal Research G. 40歳以下, 教授, 主任教授, Faculty member 7年以上の経験者は応募できない

2) Arthur Frechette Award

Prosthodontics G. Material ScienceとTissue engineeringに関連した研究から1件ずつUS \$ 1,000

3) Aubrey Shelham Award

BEHSR G. Dental Public Health Scienceに関して当該年度に発表された論文の中から1人, US \$ 350

4) Basil Bibby Award

Cariology G. 歯科学学生及び40歳以下のYoung Investigatorを対象とし, US \$ 500とIADR学会出席補助US \$ 1100まで

5) BEHSR Student Abstract Award

BEHSR G. Pre-, Post-Doctoral Student 一人ずつUS \$ 200

6) Bernard G.Sarnat (Student Award)

Craniofacial G. Dental & Graduate Student で, Poster Presentationのなかからsmall amount cash

7) Colgate Oral Health Research Award

Oral Health research G. 歯科衛生士を対象としている

- 8) Giddon Award
BEHSR G. 当該年度またはその前年度に発表された優秀論文対象。US \$ 350
- 9) Education Research Group Travel Award
Education Research G. に所属する Student および Faculty member の中から学生 US\$ 400, Faculty US \$ 600
- 10) Education Research Group Grant
歯学教育に効果的、価値ある研究プロジェクトに対し、上限で US \$ 1,000
- 11) Diagnostic System Group/Kodak Student Award
Best Student Abstract に対して US \$ 1,000
- 12) Lois Cohen International travel Award
BEHSR G. に発表する、1) 非常勤または常勤の Pre-, Post graduate Student で World Bank 分類 Lower middle class 以下の国在住者、2) 歯科医学に関連する学位を取得後5年以上経っていない Lower middle class 以下の国在住の Faculty member に対しそれぞれ US \$ 500
- 13) Phillips Oral Healthcare young investigator Research Group
Periodontal Research G. 18か月以内に PhD 取得予定の学生または Faculty member で、独立した研究プロジェクト—臨床研究—をもつ者。US \$ 10,000
- 14) IRG Young Investigator Prize for Student Research
Implantology Research G. Best implantology related student paper, 1位 US \$ 1,500 2位 US \$ 500, 3位 US \$ 250
- 15) J. Morita Corporation Junior Investigator Award
Geriatric Oral Research G. 1) Pre-Doctoral Award DDS/PhD を取得していない者 2) Post-Doctoral Award 学位取得者で、Faculty member である者、US \$ 750
- 16) Nutrition Group Best Student Abstract Award
Nutrition G. Pre- or Post-Graduate Student を対象として US \$ 500
- 17) Periodontal Research Group Presidents' Travel Award
Periodontal Research G. Pre-or Post-Doctoral Student が対象。自国内で IADR が開催される時は、US\$ 2,000, 自国外開催の場合は、US\$ 3,000
- 18) Pulp biology Group Student Travel Award
Pulp Biology G. 1) full-time Pre-Doctoral Student 2) full time Post-Doctoral Fellow を対象として US \$ 1,000
- 19) Prosthodontics Research Group Pre-prosthetic Regenerative Science Award for Young Investigator
IADR Prosthodontics Research Group と Japan Prosthodontic Society が Sponsor となっている。補綴治療前後の Regenerative Science に関する研究。1位 US \$ 1,000, 2位 US \$ 500

Other Organization

IADR EBD Network Systematic Review prize EBD Network は、IADR の Research Group ではないが、Research Group に準じた

IADR の Group 構成の一つとなっている。この Network でも重要な Oral Health Research に関連するトピックスについて、Systematic Review で優れた研究であると評価されたものについて、7,000 英鎊を賞金として援助している。

以上のように、大変多くの賞、特に学生や若手研究者に対する賞が用意されていることに気がつくと思います。決して応募方法など面倒なものではなく、気軽に、日本の研究者の方が積極的に応募して、どんどん、日本の研究のレベルの高さを世界中に知らしめることが大切ではないかと思います。指導者の先生方も、若手の方々の研究意欲を鼓舞する意味でも積極的に推薦をしていただくことを願ってやみません。

大変長くなってしまい、紙面を無駄に使って申し訳ありませんでしたが、IADR 本部役員の任期を終えて、今、JADR 会員の皆様方に任期中の絶大なご支援に感謝申し上げたいとともに、JADR からのすばらしい研究が、もっともっと国際的に高く評価されてしかるべきだという思いを訴えたい気持ちでいっぱいです。伺うところでは、日本歯科医学会との絆も今年からより密接になって、国際的には高く評価されている歯科総合学会としての IADR からの国際的情報もスムーズに日本歯科医学会へ流れるようになってきたとのこと。まことに嬉しいことと思います。JADR のますますの発展を心から念じて御礼に代えさせていただきます。有難うございました。



Ⅲ. 第85回 IADR New Orleans 総会報告

1. The IADR/Unilever Hatton Awards 1st prize (Senior Basic Research) を受賞して

小澤 重幸

(神奈川歯科大学顎顔面外科学講座)

Hatton Award は第10代 IADR (国際歯科研究学会) 会長 Edward Hatton 博士の功績を称えて1957年に設けられた若手研究者を顕彰するための賞で、Junior 部門、Senior Category-Basic 部門、Clinical Research 部門があります。第85回 IADR 総会は2007年3月21日(水)~24日(土)の4日間にわたり、米国ルイジアナ州のニューオーリンズで開催されました。今回の Hatton Award 日本代表の選出は、約半年前から書類選考の後、東京医科歯科大学で行われた英語による発表で決定しました。私は Senior Category-Basic 部門の日本代表の1人として、「Iressa (ZD1839, gefitinib) Reduces Tumor Mass through BRAK/CXCL14 expression」のタイトルで世界各国の代表20余名と共にニューオーリンズでの Competition に参加いたしました。幸運にも 1st place を受賞するという栄誉を得ましたのでこの場をお借りし報告いたします。神奈川歯科大学卒業後、顎頸部扁平上皮癌における分子標的治療薬の研究に興味を持ち、同大学の大学院に入学し顎顔面外科学を専攻いたしました。

た。入局当初、マイクロアレイ法の開発が盛んであったこともあり、生化学・分子細胞生物学分野の先生方の協力のもと、ゲフィチニブによる腫瘍縮小効果にかかわる分子の検索を TaKaRa 社製のサイトカインチップ3.0を用いて行ったことが、ケモカイン BRAK/CXCL14 をターゲットとするきっかけとなりました。その後、BRAK/CXCL14が腫瘍形成抑制効果を示すことを Ozawa et al. Biochem. Biophys. Res. Commun. 348 (2006) 406-412 で報告し、その実験をもとに発展させた研究結果で今回の IADR Hatton Award に挑みました。Hatton Award のプレゼンテーション自体は、学会会期の前日3月20日に The Hilton New Orleans Riverside Hotel の一区画で、審査員の先生方3名と発表者1名がドアを閉めた状態で行われました。会場の外では、自分の発表時間まで静かに待つ者、または仲間たちと共に発表及び質問対策に時間を費やす者とさまざまでしたが、その場は発表者の熱気に満ちていました。発表自体は午前9時より始まり、それぞれの発表者は事前に指定された時刻に会場のドアの前で待機し、呼ばれると会場内へ入場し英語による10分間の発表とその後5分間の質疑応答で評価されました。翌日3月21日に行われた盛大な開会式で、内示もなく優勝者として発表されたときは驚きともに深く感動いたしました。この賞を今後の研究生活における1つの糧として、さらに研究を進展させるため気を引き締め努力する所存です。最後になりましたが国内選考に携わった先生方、ニューオリンズで審査していただいた先生方、そして研究を指導協力していただいた神奈川歯科大学、生化学・分子細胞生物学分野の畑隆一郎教授、加藤靖正先生、顎顔面外科学講座の久保田英朗教授、生態管理医学、薬理学分野の前畑洋次郎先生、小児歯科学講座の小森令賀先生、横浜市立大学大学院医学研究科頭頸部生体機能・病態医学の佃守教授に心より感謝いたします。



指導教員の先生方と

2. Unilever Hatton Awards Competitionの Junior 部門に参加して

渡邊 仁史
(鶴見大学歯学部5年)

私が参加した IADR/Unilever Hatton Awards Competition は各

国の学生が研究成果を競い合う大会で、Junior Categories, Senior (Clinical Research) Categories, Senior (Basic Science) Category の3部門に分かれて審査が行われた。アメリカ、ヨーロッパからだけでなく、アジア、オセアニア、南アフリカなど世界18地区、計45名が参加し、Junior (学生) 部門には日本からは奥羽大学の黒田真美さんと私の2名が参加した。

私の発表タイトルは "The antifungal mechanisms of β -defensins on *Candida albicans*" で、粘膜上皮細胞から産生される抗菌ペプチド" β -デフェンシン"が口腔内常在真菌である *Candida albicans* に与える抗真菌作用の解明であった。

審査はポスターを使って口頭発表するポスタープレゼンテーション形式で、審査員以外は会場に入れられない特殊な環境下で行われた。審査形式は国内選考会とほぼ変わらない形式であったのだが、驚くべきことはその雰囲気的自由さであった。まずは審査員の先生方の自己紹介から入り、次いで私が自己紹介をした。その後握手を交わした後にルールを説明された。「あなたの使える時間は10分間、好きに使ってください。」

私はいつものように「発表を始めて下さい」と言われるとばかり思っていたのでこれには驚いた。10分間の発表後、質疑応答では実験条件や根拠となる反応機構など、かなり厳しく内容に関する質問をされたが、最初の握手のおかげで緊張もなく、自分の英語力をすべて駆使し自信を持って答えることができた。

大会最終日は Competition 参加者によるポスター発表が一般参加者向けに行われ、私以外の Competition 参加者の研究内容も聞くことができた。放射線学分野など臨床的な技術についての研究発表もあり、低学年から臨床に参加している海外の歯学部学生の経験の深さを感じた。また研究内容では *Candida* に関するものが私を含めて3演題も発表されていて、易感染宿主における日和見感染症であるカンジダ症が、世界中でいかに注目されているのかが窺えた。

学生同士の情報交換も活発で、発表当日、初めて会った学生同士で自分たちの大学生活や歯科の現状について話し合ったりもした。またお互いの研究が論文になったら交換しようという約束も交わした。こういったコミュニケーションも国際会議ならではの楽しさのひとつではないだろうか。

IADR/Unilever Hatton Awards Reception Party では各部門の優勝者が表彰されただけでなく、参加者全員、一人ずつ名前が読み上げられIADR/Unilever Travel Awards を授与された。

今回の経験から、アメリカと日本の最も大きな相違点は、馴れ合いにならないが親密感があること、すべてが自己責任である反面、すべてが自由であることの2点ではないかと感じた。この2点がアメリカが世界をリードする人材を輩出する国の原動力になっているのではないだろうか。

3. IADR/Colgate Research in Prevention Travel Award を受賞して

牧野 路子

(九州歯科大学大学院口腔再建リハビリテーション学分野専攻)

2007年3月21～24日にアメリカ、ニューオーリンズで開催された第85回IADR総会において IADR/Colgate Research in Prevention Travel Award を受賞させていただきました。このような栄誉ある賞を頂いたことを大変光栄に存じます。今回は世界6地域の若手研究者が受賞し、私はアジアの地域の代表として選ばれました。3月23日には Colgate 主催による昼食会を兼ねた表彰式が行われ、ほかの受賞者の方々とそれぞれの研究やお互いの国のことなどを話すことができました。このような国や地域を超えた交流の場を持つことができたことは、私にとって大変貴重な体験となりました。

私は今回 "Effects of Sleep Bruxism Behavior on Salivary Stress Biomarkers" という演題でポスター発表をさせていただきました。日頃臨床をしていて、ブラキシズムなどの咬合悪習癖が咀嚼器官に何らかの悪影響を与えているのを目の当たりにする機会が何度もあります。また、ブラキシズムなどは補綴治療を進める上で潜在的な危険因子であるも考えられていますが、明確なブラキシズムの診断基準などはまだ明らかになっていません。私達の研究室では歯科補綴治療のリスクファクターであるブラキシズムの客観的評価方法を確立することによって適正なリスク評価を行い、その結果を利用して様々な手段で口腔機能低下を予防することを目標に研究を行っております。今回受賞させていただいた研究はその過程で行われたものです。当初、我々は、ブラキシズムは、精神的ストレスから発症するとする仮説を立て、精神的ストレスを客観的に測定できる唾液中のストレスマーカータンパクの一種であるクロモグラニンAに注目して研究を進めてきました。今回発表させていただいた研究結果は、我々の仮説に反し、ブラキシズムの行う人ほど午前中のストレスマーカーレベルが低いという結果が得られました。これはブラキシズムをすることで、ヒトは精神的ストレスを解放しているのではないかという可能性を示唆するものでした。しかし、今回の研究だけではまだ不十分ですので更に研究を進めていく必要があると考えております。今後は今回の受賞させていただいたことを励みとして、なお一層研究に邁進していきたいと思っております。



受賞会場での記念撮影

最後になりますが、研究を指導して頂いている細川隆司教授、正木千尋先生およびこの研究を進めるにあたってサポートしていただいた医局員の先生方、関係者の皆様がこの場をお借りして心から御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

4. Arthur R. Frechette Research Award Competition 第1位を受賞して

會田 英紀

(北海道大学大学院歯学研究科口腔機能学講座、UCLAワイントロップセンター、骨インプラント・サイエンスチーム (LBIS))

第85回IADR総会 (New Orleans, USA) において上記の賞を受賞させていただきましたので、簡単にご報告させていただきます。本賞は1991年に制定されたもので、今年で17年目になります。選考は2段階で行われ、まずその年の IADR 総会に申し込みのあった補綴関連の演題の中から、abstract をもとに審査を行い、6名の最終候補者が選出されます。その後、最終候補者は IADR 総会の約1ヶ月前までにそれぞれ発表内容を論文形式にまとめて事前に提出することを求められます。この論文原稿と総会での口演発表をもとに最終審査が行われ、1位受賞者が決定されます。近年、補綴学の研究対象が多岐にわたるようになってきたため、2004年以降は "Material Science or Bioengineering" と "Biological Science or Tissue Engineering" の2つの部門それぞれから1位受賞者が選出されております。歴代の1位受賞者(計21名)のうちJADRの会員からの選出は私で4人目となり、大変名誉に思っております。

さて、受賞の対象となった演題 "Accelerated osseointegration around light-induced super-amphiphilic titanium surface" は、私が2003年8月から2005年9月までの約2年間留学していたUCLA歯学部ワイントロップ再生生体工学研究所 (Los Angeles, USA) 内の小川隆広准教授がディレクターである骨インプラント・サイエンスチーム (LBIS: Laboratory for Bone and Implant Sciences) にて行った一連の研究の一部をまとめたものです。その内容は、紫外線処理により超両親水性にしたチタン表面がオッセオインテグレーションの早期獲得を可能にするというもので、*in vitro* ならびに *in vivo* の実験系でその効果を検証しました。ラット大腿骨に円柱状の純チタンサンプルを埋入し、術後2、4週にオッセオインテグレーション強度を評価するためのバイオメカニカル試験とインプラント-骨接触率等を評価するための組織計量を行いました。その結果、紫外線処理には、実験に用いた2種類のチタン表面(機械切削面と酸処理面)の両方に対して骨伝導能を高める効果があることが示されました。特に、術後2週の紫外線処理した酸処理面のオッセオインテグレーション強度は、未処理の酸処理面の3.1倍になっており、未処理の酸処理面では術後8週に相当する値であることがわかりました。また、術後4週の紫外線処理した酸処理面では、インプラント-骨接触率がほぼ100%になっ

ていました。さらに、機械切削面と酸処理面を有するチタンディスク上でラット骨髄由来間葉系幹細胞を培養した *in vitro* の実験において、紫外線処理は骨芽細胞への分化を妨げることなく、増殖を倍増させる効果があることが確認されました。以上のことより、我々が新規に開発した紫外線誘起超両親媒性チタン表面は、オッセオインテグレーション獲得期間を1/4に短縮する可能性があり、今後のインプラント歯科学の発展に多大な貢献をしていくものと確信しております。

最後になりましたが、終始懇切丁寧な研究指導をしていたいただいたUCLAの小川隆広准教授はじめUCLAでの共同研究者の方々、ならびに留学の機会を与えてくださった北大の大畑昇教授はじめリハビリ補綴学教室の教室員各位にあらためてお礼申し上げます。



受賞会場でプラークとともに記念撮影



プラーク

5. Pre-prosthetic Regenerative Science Award を受賞して

月村 直樹

(UCLAワイントロープセンター骨インプラント・サイエンスチーム (LBIS),
日本大学歯学部補綴学教室第2講座)

本年3月21日から24日にアメリカの New Orleans で開催されました第85回IADR総会において上記の賞を受賞いたしました。受賞の対象となりました演題 "Co-culture effect of peripheral blood mononuclear cells on osteoblast" は、現在、私が留学しているUCLA歯学部ワイントロープ再生生体工学研究所の骨インプラントサイエンスチーム (LBIS: Laboratory for Bone and Implant Sciences) で行いましたプロジェクトの一つで、まだ着手し始めたばかりの研究です。また、同総会にて Arthur R. Frechette Research Award を獲得された北海道大学大学院歯学研究科口腔機能学講座の會田先生もUCLAの留学の際に同研究チームにて行なわれた研究成果での受賞であり、私にとりまして二重の喜びとなりました。

本賞は、IADRの補綴研究グループと日本補綴歯科学会の両者の後援のもと本年より新しく制定されたものです。この賞

は、若い研究者の研究を奨励するために制定されたもので、ティッシュエンジニアリング、また骨、歯、軟組織の再生医療、さらに移植材の研究、そして顎顔面領域の再生生体生理学やインプラント生体学などの前処置のおよび補綴学関連の再生医療の多岐にわたる学際的分野にトピックスをあてた、オリジナリティーあふれる研究に対して贈られるものです。今回、決して年齢的に若くはない私が、制定後初めて本賞を受賞できたことは、身に余る光栄であり、IADRの補綴研究グループを始め日本補綴歯科学会の皆様から感謝したいと思っております。今後さらに、補綴学の発展のため微力ではありますが、お手伝いできますよう研鑽を積んでまいりたいと思っております。

さて、その演題の内容ですが、ヒトの骨髄由来の間葉系幹細胞を通常のメディアと分化促進するメディアとで培養し、そこにヒトから採取した血液から末梢血単核細胞 (免疫細胞) を加え共培養し、間葉系幹細胞の増殖、分化および石灰化能について *in vitro* の実験系で検証いたしました。その結果、増殖、分化および石灰化能すべてにおいて顕著にその機能を高める効果があることがわかりました。また、末梢血単核細胞のあるサイトカインでアクティベートすると単核細胞単独で作用させたものよりさらに機能亢進が認められました。このことは、未だ不明な点が多い骨免疫学の一つである骨芽細胞と免疫細胞との関連を明らかにする糸口になると同時に、過去に報告された多血小板血漿を用いた方法に代わるような新しい補綴的な応用が考えられると思われれます。さらに、この研究を進めることで補綴歯科学の新たな研究分野が開拓され、そして発展していくことを願ってやみません。

末筆にあたり、終始懇切丁寧な研究指導をしていただいたUCLA歯学部ワイントロープ再生生体工学研究所の小川隆広准教授をはじめ私が所属している骨インプラントサイエンスチームの共同研究者の方々、ならびに留学の機会を与えてくださった日本大学歯学部の大塚吉兵衛学部長、伊藤公一病院長、石上友彦教授はじめ補綴学第2講座の教室員各位にあらためてお礼申し上げます。



受賞会場での記念撮影

6. 第85回IADR学会報告

須田 直人

(東京医科歯科大学歯学総合研究科顎顔面矯正学分野)

第85回IADR General session が3月21 - 24日の会期のもとアメリカ ルイジアナ州ニューオーリンズで開催された。初めて往路の機内から見下ろしたニューオーリンズの印象は、沼地や湿地帯が多く、低地に作られた街というものであった。カトリナの被害が甚大だった原因も容易に想像できた。

今回の大会は、Ernest N. Morial Convention Center とその周囲にある Hilton Hotel を中心に行われた。アメリカでは人口100万人規模の都市であっても、大変立派な Convention Center に驚かされるのがこれまでもしばしばあったが、人口48万人足らずのニューオーリンズと同 Convention Center は非常に立派で巨大なものであり、建物内部に入ってもIADRの学会会場にたどり着くには10分以上歩く必要があった。立地も、中心街に程近いミシシッピー川沿いであり、付近にはショッピングモールや水族館、クルーズの発着地もみられる賑やかな場所であった。同Convention Centerでは、同時期に米国心臓病学会 (ACC) の学術大会も盛大に開催されており、歯科の大会との規模の大きさ、賛助企業数の違いを実感せざるを得なかった。

さて、大会期間中JADR会員には大変嬉しいニュースが届いた。既にご存知の方がほとんどはと思うが、神奈川歯科大学口腔難治疾患研究センター長 畑隆一郎教授、同大学 口腔外科第2講座 久保田英朗教授のご指導のもと研究を行ってきた小澤重幸先生 (同大学口腔外科第2講座) が、IADR Hatton Award で First Prize に輝いた。今回は、特に激戦と言われる Senior Basic Science Category から選出され受賞したものであり、大変価値の高いものである。同じ日本人として誇らしい気持ちを感じていた。

さて私の報告記では、シンポジウムとして3月22日に行われた Genetic and Transcriptional Control of Osteoblast Differentiation に関して記す。このシンポジウムは、Craniofacial Biology, Mineralized Tissue, Pulp Biology の3つの Working Group がスポンサーとなって共催され、4人の演者がRunx2の様々な遺伝子機能に関して発表した。中でもアラバマ大学の Javed A は、TGF- β や BMP のシグナル因子として働く Smadと、Runx2 間に protein interaction がみられること、さらにこの interaction には、Runx2中のSMID と呼ばれる領域が重要なことを報告した。この発表のように、新規因子に関する報告よりも、報告済みの因子同士がどのような相互作用を介して Osteoblast Differentiation に関与するかに焦点をあてた研究が増えていると感じた。

7. Dental Materials - Ceramics & Cements

吉田 圭一

(長崎大学医学部・歯学部附属病院・総合歯科)

2007年3月21日から24日、アメリカ合衆国・ルイジアナ州・ニューオーリンズにて第85回IADR総会が開催された。一昨年8月末に襲来したハリケーンカトリナが未曾有の被害をもたらしたのはまだ記憶に新しい。街並には一部その爪痕が散見されたが、随分復興しているように思えた。会場となった Ernest N. Convention Center は想像以上に規模が大きく、端から端まで600~700メートルあったと思われる。

約3,000題以上の発表の中で、Dental Materials 分野は全部で700題以上に上り、全演題の約1/4とこのグループの会員の多さを物語っていた。この分野の中で、私が発表した研究内容と関連の深い Ceramics & Cements の項目の中で興味を抱いた演題をいくつか報告する。

Gutierrez-Aceves らは、キャストブルセラミックスの IPS-Empress-2とレジン接着剤との接着強さの改善には、いずれのレジンセメントでも5%のフッ酸処理とシランカップリング剤の併用が有効であると報告した。Prokopowitsch らは、カリ長石の焼成陶材とレジンセメントとの接着において、フッ酸処理か CoJet-Sand, アルミナプラスティングとシランとの併用が有効で、リン酸やリン酸フッ化物では不相当であると報告した。審美性が高い各種セラミック材料の装着にはそれぞれの材料に応じた適切な処理が必要不可欠であると考えられる。

ブリッジにも適応とされるジルコニアが国内外で数多く製品化され発売されている。Bottino らは、インセラムジルコニアブロックの表面処理によるパナピアFとの微小引張接着強さを評価した結果、110 μ mのアルミナプラスティング後にシランカップリング剤を塗布したものが、150日間の水中浸漬後の6,000回の熱サイクル後にも接着強さが低下しなかったと報告した。Wang らは、ジルコニアの表面処理として、研磨や粒径の異なるアルミナによるプラスティングと熱処理が曲げ強さに及ぼす影響を検討した結果、50 μ mのアルミナや研磨によって曲げ強さは向上したが、120 μ mのアルミナでは逆に曲げ強さが低下し、熱処理による影響は認められなかったと報告した。さらに、Fahmi らは、ジルコニア (ビタ) と陶材との接着強さを向上させるには、ダイヤモンドバーによる研削と1,000 $^{\circ}$ C15分間の熱処理が有効であると報告した。ジルコニアとレジン接着剤を強固に接着する表面処理として、アルミナによるアンカリング効果と接着性モノマーが有効だと考えられる。

今後確実に使用頻度が増加するセラミックスによるメタルフリー修復においては、各種接着剤と強固に接着するセラミックスの種類に応じた表面処理方法や処理剤を適切に使用しなければ、臨床でトラブルが起こらない信頼性の高い材料として評価されないと考えられる。

8. Dental Materials

武本 真治

(東京歯科大学歯科理工学講座)

今回、IADRの学術大会が開催された New Orleans は、記憶に新しく2005年夏ハリケーン“カトリーナ”によって大被害を被った小都市である。実際に街の印象としては、よくここまで復興したなあと感じたが、まだ、ハリケーンの激しさが伺える場所も見られ、復興に向けて努力が続いている様子だった。学術講演会の会場となった Convention Center は大きなホールが A~J もあり Center に着いてから開催されるホール (I2-J) までかなりの道のりだった。

雑感としては、今回の学術大会の総演題数は3012題であり、Dental Materials 領域では約700演題(約23%)の口頭発表またはポスター発表がなされた。印象としては、接着に関係した発表(機械的性質や表面処理など)と漂白に関連した発表が大変多く注目度も高く、私が発表した金属に関する発表が非常に少なかった観がある。接着に関しては、ジルコニアの接着とファイバー強化型コンポジットレジンプスト(FRCポスト)を使用した支台築造に関するものが特に目を引いた。なかでも、FRCポストを支台築造する際のFRCポストとコアレジンの接着、歯質との接着方法やその接着強度を測定する技法についての検討が数多く見られた。それらの評価方法として、Push out試験、Pull out試験、間接引張り強さ試験などが報告され、それぞれの試験方法による差異がよく現れていると感じた。しかし、FRCポストの形状や接着操作の要因との関係で、用いている評価方法で何を明らかにしようとしているのかという疑問が生じる報告もあり、実験結果の精査が不十分と思われた。

漂白に関しては、Clinical Trial に関するものが多く見受けられ、審美歯科への強い関心が伺えた。大半は漂白剤として過酸化水素や過酸化尿素を用いたものでその濃度や期間によってどの程度漂白されているかであったが、なかには0.09%の過酸化酢酸という希薄な溶液を使用しての漂白や、酸化チタンを添加した漂白剤の漂白効果に関する発表もあった。また、漂白した歯質の後戻り着色に関する発表や漂白した歯質への接着に関する発表もあり、漂白作用による歯質の白色化の利点とともに再着色や接着などの課題も見られ、まだ検討する必要があると感じた。

金属に関する発表はTi-Cu合金やTi-Zr合金などチタン合金の人工唾液中での耐食性、铸造性および切削性を評価しているものがあり、铸造用およびCAD/CAM用合金としてチタン合金は注目されていた。私は“Electrochemical behavior of titanium in fluoride and hydrogen peroxide-solution”と題して口頭発表させて頂いた。自分の発表および全体の討論でも感じたことだが、基礎的な研究から臨床へのアプローチ、逆に臨床からのフィードバックによる基礎的研究を如何に目的立てて話をする事ができるかがIADRの発表では重要であると感じた。

最後に、Dental Materials グループの Business Meeting に参加させて頂いたが、たくさんの国から人が集まっている中で大阪大学の今里聡先生がグループの President となった。同じ日本国内に籍を置くものとして誇りに思うとともに、歯科材料分野がグローバルに発展できるよう手腕を発揮して頂きたく思います。また、自分自身も参加発表して得られた知識、情報、刺激を糧にして日々精進していくつもりです。

9. Salivary Research

内橋 賢二

(大阪歯科大学生理学講座)

今回はホテルがなかなかとれず、出発間際までこれほど気を揉んだことは今までにはなかった。ホテルの部屋の絶対数が足りなかったようで、当初は空港近くのモーテルしか取れず、出発の前々日によくダウンタウンのはずれで取れはしたが、部屋の電球がほとんどは壊されたまま、埃だらけの部屋(\$160/1泊)には閉口した。市街地はまだまだ復興と呼ぶにはほど遠く、徒歩で30分の学会場までの道すがら、工事中の道路や閉切ったままのビルを多く見かけた。

学会会場の Ernest N. Morial Convention Center は例に漏れず、アメリカの Convention Center のなかでも最大級のもので、IADR の3倍の規模で心臓外科学会が同時開催されていたのだから、その広さは推してはかるべしである。

そんな中、総演題数は3,063を数え、そのうち Salivary Research に関するものは例年よりも多い52題、それらのうち日本からの演題は7題であった。

最近の唾液腺や唾液に関する研究の主流は、FDIやNIDCRの「唾液マーカーの診断上の可能性の追求を考慮すべし」との提唱もあり、唾液のスクリーニングの可能性を追求する研究が増えつつある。それを反映して、唾液を biomarker として応用するための試みや、そのための proteome 研究が増えていた。また、抗細菌因子の研究や水分分泌機構に関する研究も具体性が増してきている。診断に関するものでは、口腔癌の診断に β -glucosidase が有用なことや、またとくに興味深かったのは唾液中のホルモン(カルシトニン)が歯周病、敗血症および甲状腺の癌の biomarker として有用であるという発表であった。一方、臨床系の演題では、Sjogren 症候群に関する演題が最も多く、診断法に関する研究が主で、残念ながら原因療法への道はまだまだ険しいようである。ただし、Sjogren 症候群では水分分泌における傍細胞輸送経路の主役ともいえる E-cadherin の分布に異常が起こることが示唆され、水分分泌機能の回復の解明に役立つのではないと思われる。Proteome に関する研究では、唾液中の抗菌因子の解析、バイオフィーム形成阻害因子、抗う蝕因子など多岐にわたっており、今後益々新しい知見を得ることが期待でき、Salivary Research も新展開を迎えることなるだろう。

私自身の発表は最終日(土曜日で午前中で閉会)だったの

で、残念ながら出席者が少なく、活発な討論とはいかなかったが、Dr. Hand が今年もポスターの前に立たれているのを目の当たりにして、ほんとうに頭の下がる思いがした。

10. Cariology Research

野村 義明, 花田 信弘
(国立保健医療科学院口腔保健部)

Caries Prevalence and Risk factors のセッションではう蝕の疫学に関する6演題の発表が行われた。最初の2演題はブラジル、アメリカそれぞれの前向きコホート研究によるもので、Enamel Defects がう蝕発症の最も有用なPredictorとなることを示してした。両演題ともロジスチック回帰分析により交絡因子の調整を行っていたが、交絡因子としては Socioeconomic Status (SES), Breast feeding, Oral Hygiene 等であり細菌の因子の調整は行われていなかった。次の演題も同様にアメリカでのコホート研究であったが、う蝕の診断基準としてICDSを使用していたことが注目された。この研究では、甘味料としてのソーダの飲料回数や SESがう蝕の重傷度と関連があることを示していた。

ミュータンスレンサ球菌を評価した発表では Detroit Center for Research on Oral Health Disparities と称する1012家族を追跡調査している研究の一部で10名の母親と10名の0-5歳のその子供のミュータンスレンサ球菌の伝播を調査したもので、歯垢からDNAを抽出し、PCRによる変性濃度勾配ゲル電気泳動法を用いてミュータンスレンサ球菌の遺伝多型から菌株の一致を調査していた。結果は80%の子供、95%の母親がミュータンスレンサ球菌に感染しており、ミュータンスレンサ球菌の遺伝子の一致率は94%であることを示していた。その他、オーストラリアでのう蝕予防プログラムの評価、香港から根面う蝕の治療方法として、う蝕を手用器具のみで除去し化学重合性のグラスアイオノマーで充填した場合、従来の光重合性のグラスアイオノマー充填と予後に差がなく高齢者に苦痛を与えない治療方法としてこの方法でも充分対応できるとする発表があった。

う蝕関連のシンポジウムでは Cariogenic Dental Biofilm が4名の演者によって行われた。B. GUGGENHEIMからは、Zurich Biofilm model に関する一連の研究の紹介がなされた。W. BOWEN からはバイオフィームにおけるポリサッカライドの重要性に関する発表があった。この発表では、共焦点レーザー顕微鏡による観察において Live and Dead 等では染まらない部分はバイオフィームのチャンネルとして思われがちだが、この部分にはポリサッカライドが存在し、ポリサッカライドを染色する事によって従来バイオフィームチャンネルと思われていた部分はそのかなりの部分がポリサッカライドで埋まっているという、研究者にとって大きな示唆のえられる発表であった。R. BURNE からはバイオフィーム内での Rel A 遺伝子の発現の重要性について H. KOO からは天然物質の Apigen,

Franoseal が GTF の発現抑制によりバイオフィーム合成の抑制に有用であることが示された。

以上のように基礎、臨床の両面において有益な情報が多く得られる学会であった。

11. Cariology and Periodontology

稲葉 大輔
(岩手医科大学歯学部予防歯科学講座)

今回、筆者らのグループは唾液をテーマに、カリオロジー(唾液再石灰化促進能の評価)とペリオドントロジー(唾液による歯周病スクリーニング)にエントリーした。カリオロジーは1カテゴリーで10セッションが生まれ、合計115演題が報告された(下表参照)。プログラムを検索したところ、再石灰化のキーワードでは50演題がヒットし、再石灰化が今日ますます重要性を増し、カリオロジーが予防というテーマにシフトしている傾向が明確であった。また、今回、特徴的であったのは、下表からわかるとおり、齲蝕診断、酸蝕症、リスク因子の各テーマで演題が多かったことである。これは、先進諸国での齲蝕の軽症化にともない、齲蝕の診断では脱灰性白斑の検出が重要となってきたこと、ならびに、齲蝕減少にともないソフトドリンクなど酸性食品などによる酸蝕症がクローズアップされてきたことなどが、その背景にある。日本では酸蝕症はまだ注目されていないが、たとえば健康食品としての食酢の飲用習慣との関連でやがて歯科的な問題となると予測される。なお、今回参加した診断システムグループの会議では、次回のIADRで齲蝕診断システムをテーマにシンポジウムを企画することが決定された。

一方、ペリオドントロジーは診断・疫学、病因論、療法の3カテゴリーに分けられ、合計269演題が報告された。このうち、筆者らが参加した診断・疫学のカテゴリーには69演題が含まれ、なかでもリスク判定関連が38演題にのぼった。ただし、すでに複数の齲蝕診断装置が実用化されているカリオロジーの現状とは違い、歯周疾患については実用的な診断システムや装置は現在もなお開発途上という状況のようであった。高齢化が進むなか、現在、歯周疾患診断の主流である歯周プロービングの侵襲性が懸念される背景からも、非侵襲的で定量性の高い歯周疾患の診断ツールについて今後の研究に期待したい。今回の演題の分布で特徴的であったのは、歯周疾患の宿主応答あるいは全身との関連をテーマにした報告が診断・疫学と病因論の両カテゴリーで合わせて64演題にのぼっていたことである。とくに、歯周病と心臓血管疾患および脳血管疾患の関連については、大規模コホート調査を含めエビデンス・レベルの高い研究が注目を引いた。歯周疾患と全身疾患の関連がほぼ確立されつつある現状から、今後はそれをゲートウェイとして、デンタルとメディカルの共同による研究と臨床が進展することを強く期待したい。

カリオロジー (全演題のセッション別分布)

日程	Seq#	セッション	演題数
3/21	9	歯科材料と齲蝕	6
3/22	52	脱灰・再石灰化, フッ化物	6
	82	歯のフッ素症, 脱灰・再石灰化	16
	118	齲蝕, 酸蝕症, 脱灰・再石灰化	15
3/23	142	細菌学・根面齲蝕	6
	194	齲蝕診断, レーザー, 歯のフッ素症	16
	195	バイオフィームと抗菌薬	15
	227	疫学と齲蝕リスク因子	17
3/24	248	齲蝕有病とリスク因子	6
	287	歯科材料, バイオフィーム, 齲蝕	12
		合計	115

ペリオドントロジー (全身との関連のみ)

日程	Seq#	セッション	演題数
3/21	20	全身との関連性*	5
3/22	127	全身状態/妊娠	8
3/23	174	全身への影響	6
	236	全身状態/動脈硬化	6
	237	歯周状態と全身の相互作用*	28
3/24	297	細菌学/宿主応答	11
		合計	64

12. Microbiology/Immunology and Infection Control

泉福 英信

(国立感染症研究所細菌第一部)

私自身 New Orleans に行くのが2回目であったため、カトリナ後街がどの程度復興しているのか、とても興味深く85回 IADR New Orleans 大会に参加した。意外に Jackson 広場や Barbone street など観光地にめだった被害が感じられず、話によるとその周囲はいまだに被害が残っているとのことだった。今回は、6月に IADR の Brisbane 大会もあり年度内に2回目の開催であったこと、New Orleans は日本から比較的行きにくいこと、ハリケーンカトリナ被害のイメージなどから日本からの参加者が少ないのではないかと予想していた。私が報告する Microbiology/Immunology and Infection Control の発表をみると、242題中28題が日本からの演題で、予想通り Brisbane 大会 (Brisbane大会は、JADRとの共催だったこともあって比較的日本の演題が多かったのかもしれない。)よりも少なかった。演題は、*Aggregatibacter actinomycetemcomitans* (これは、*Actinobacillus actinomycetemcomitans* のことである。名称が変わったのは今大会一番の驚きだった。)、*Porphyromonas gingivalis*, Streptococci, Candida, 臨床微生物, 感染制御, 免疫などの部門に分かれ、遺伝子や蛋白質の発現と機能, Biofilm形成, 上皮細胞への付着や侵入, 抗菌剤の効果, 院内感染, HIV

感染と口腔微生物との関係, 疫学的な調査, 免疫担当細胞の応答などの要素を取り入れながら発表されていた。簡単に一例まとめると、微生物の病原性に関する遺伝子や蛋白質を見つけ、それらの関わりを菌の付着, Biofilm 形成, 遺伝子の調節, 機能蛋白質の発現, 代謝, 細胞への侵入などをエンドポイントにして研究が行われていた。

以前のこの分野では、co-aggregation を研究するため複合微生物実験も行われていたが、ここ20年近く遺伝子研究技術を利用した単一菌の研究が中心となっていた。しかし、バイオフィーム研究が注目されたこともあって、Streptococci, *Actinomyces naeslundii*, *Veillonella*, *Candida* などの口腔における共生性を考慮した複合微生物実験が行われるようになったのが近年の新たな傾向である。500種類以上の微生物が存在する口腔の特殊性を考えれば、単一菌を用いた研究だけでは不十分であることに間違いはない。

2003年にCDCにより歯科臨床における院内感染予防ガイドラインが発表されたことの影響もあってか、デンタルユニット循環水における微生物汚染, 化学物質を用いたデンタルユニット配管内の除菌処置, 歯科医師や歯科衛生士の全身感染症についての疫学調査など院内感染関係の発表が10題以上あったことが注目すべき点であった。

13. Microbiology/Immunology and Infection Control

新井 貴博

(東京歯科大学有床義歯補綴学講座)

今回の IADR におけるプログラムの構成は午前中にはシンポジウムや Oral Presentation, 午後には Poster session と区別されていて、口頭発表とポスター発表とが重なることなく両方に参加することができた。4日間の会期の内に Microbiology / Immunology and Infection Control の分野はすべての日に組み込まれていた。Oral microbiology の口頭発表では臨床との関連性が高い高齢者における呼吸器感染の口腔ケアの重要性に関しての発表が強く印象に残った。内容としては嚥下性肺炎を含んだ呼吸器感染の予防を前提に、歯科衛生士の専門的口腔ケア (POHC: Professional oral health care) により、口腔内の MRSA を含むブドウ球菌, 緑膿菌, カンジダ菌の生菌数が減少し、口腔衛生状態の改善が認められたというものであった。又、POHC 実地グループでは嚥下性肺炎の死亡率が減少し、POHC 未実地グループに対し有意な差が認められていた。さらにその発表の中で高齢者の口腔ケアによるインフルエンザの感染予防に関しても述べていた。口腔・咽頭微生物により産生されるノイラミダーゼやプロテアーゼがインフルエンザウイルスの付着能力を高め感染力を増している可能性があり、口腔内微生物数を減少させることはインフルエンザの感染力を減少させるという報告には興味をもった。臨床の現場においても患者に示すことができるデータとして大変価値のある

ものであると感じた。その他の発表ではバイオフィルムの形成時間や微生物叢の変化を時間と共に追ったものや、バイオフィルム内の微生物は菌種間で戦争が起こっていると述べた発表もあった。

Poster session では特にカンジダや歯周病原菌に関する発表が多く見受けられ、それらの口腔内微生物による感染症への予防が高い関心を集めていた。その中でもカンジダにおいてはバイオフィルムの形成に対する抑制に関する発表が多かった。

今回、はじめてのIADR参加であったが、海外の多数の研究者の発表を聴講し、大いに刺激と感銘を受けた。専門分野、専門外の分野の研究者と共に討論し、交流を深めたことは私自身大きな財産となるであろう。本学会で得た多くの知識と経験を今後の臨床、研究、教育にいかしていくつもりである。

14. Mineralized Tissue Research

中野裕紀子

(McGill University, Faculty of Dentistry, Montreal, Canada)

第85回大会での Mineralized Tissue Research 分野の演題数は口演35, ポスター132であり、そのうち日本の大学・研究機関からの発表は口演がわずかに1演題, ポスター19演題と例年に比べてやや少ないように感じた。特に口演は日本人が筆頭演者のものは皆無で、日本での硬組織研究の傾向と本大会のプログラム選考の意図に隔たりがあった様に感じられた。また本分野のトピックスの多くは Pulp Biology & Regeneration Research の内容と共通しており、研究者も重複しているように思われた。実際 Pulp Biology & Regeneration Research のセッションでは、フロアに私自身を含めて多くの Mineralized Tissue Research 分野のメンバーを認めたのが印象的であった。口演はエナメル質・象牙質タンパクに関する演題が主流であり、硬組織研究における歯科分野の研究者の底力と結束、加えて骨基質と比較しての歯牙硬組織基質の unique さと奥深さを改めて感じた。また演者が高名な Primary Investigator である発表が多く、学会発表と言うよりもさながらセミナー・シンポジウムを聞いているかのごとく、個人的には非常に勉強になる機会であった。私自身の研究対象である骨の Biology に直接した口演発表は従ってわずかであったが、そのなかでも大会初日の Mineralized Tissue Research 分野の Keynote Address は、最新の骨細胞に関連した知見が満載されており、非常に興味深いものであった。演者である Bonewald 博士が自身のグループの最新の所見として紹介した ex vivo live imaging による頭蓋骨骨細胞の motion を観察したデータには特に感銘を受けた。データの詳細は大会最終日の口演セッションでも発表され、実際の映像を目にした多くの参加者が私同様に興味を覚えていたように見受けられた。今後、生体内における骨細胞の動態の証明と詳細の解析がなされることが大いに期待される。

ポスターセッションは口演に関連した各研究室からの若手の演題と、エナメル質・象牙質タンパク研究以外の演題から構成され、こちらに骨を取り扱った演題が多く振り分けられていた。活発なディスカッションを諸所で見ることが出来たが、難点を挙げるとすれば、大会2日目・3日目のディスカッションタイムがそれぞれ2分割されており、ポスターの掲示位置が同日発表でも離れた位置にあったこと、また会場のアレンジの都合上か、同じディスカッションタイムのポスターも休憩エリアで大きく分断された位置に配置されていたため、Mineralized Tissue Research のポスターとして一望出来なかったことである。他の部門でも同じであったのだろうが、今後の大会でより便のよいアレンジがなされることを希望したい。

15. Prosthodontics Research

小川 徹

(東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野)

今回85thIADRの開催地は2年前ハリケーン・カトリーナにより大打撃を受けたニューオーリンズ、渡航前はその被災の影響を心配していたが、都市中心部に至っては復興が進んでおり街は予想していた以上に活気にあふれ、学会は盛大かつスムーズに開催された。

今回は総演題数約3000の発表があり、その中で私が主に専門とする Prosthodontics Research 分野は、プリズベンで行われた前回大会より演題数は増え、175題の活発な発表が行われた。演題の内容としては、いわゆる歯科補綴の基礎的研究や歯科材料、インプラントに関するものが多かったものの、今回は臨床的な研究発表も比較的多かった。私としては Denture に関するセッションに興味を惹かれるものが多く、予想以上のものであった。

一般の Oral, Poster presentation はもちろんのこと、今回もセッティングされた Arthur R. Frechette Research Awards や、group symposium symposiaは非常に興味深いものであった。Prosthodontics Research分野の symposium は、“Molecular and Nano-design of Dental Implants”と題され、この symposium の主催者となった小川隆広先生 (UCLA) を含め4人の講師の先生により行われた。タイトルどおり、ナノスケールの超微細な観点からの biological な研究報告がなされ、近年注目されているインプラント表面の性状やコーティング等に関する内容のものが主に示された。その中でも、S.TOSATTI はインプラント表面を微細な粗造表面 (SLA) にすることに加え、さらにその表面に生体機能化させたポリマーコーティングすることで (Biofunctionalization)、骨芽細胞活性や骨添加が促進するなどの結果を報告し、非常に興味を惹いた。それ以外の先生の発表も新しい着目点からのもので、新しいインプラント治療の発展を予感させるものであった。

一方、今回 Prosthodontics の business meeting やその後の reception に参加することができたが、Prosthodontics Research

の現状や動向をうかがえ、また、多くの国々の研究者と意見交換する場が持てた。私のような若手の研究者にとっても幅広い知識や経験を得ることができ非常に良かったと思う。また、Arthur R Frechette Award Competition や今回から新しく日本補綴歯科学会がスポンサーとなった Pre-Prosthetic Regenerative Science Award など優秀な研究者に対する賞も設けられ、日本からも数名の先生が受賞され、私の研究意欲もいっそう引き立てられた。

16. Prosthodontics Research

山本 将弘

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科摂食機能保存学分野)

今回の学術大会が開催された New Orleans の街は、連邦政府やオフィスが集中する Central Business District (CBD) と、下町で観光客が集まる French Quarter とが隣り合う特徴的な都市だった。寒かった東京とは比べものにならないほど暖かく、半袖で過ごせるほどの気候で、学会開催にはベストシーズンだった。会場となった Convention Center は CBD に属し、ミシシッピ川のほとりにあった。端から端まで歩くのに15分かかるほど広く、綺麗な建物で、2年前の大型ハリケーン、カトリーナの被害は全く感じさせなかった。

今大会の総演題数は、Withdrawn を含め 3063 あり、Prosthodontics Research セッションでは、4日間の会期中に176 (口頭発表35演題、ポスター発表135演題) の発表があり、活発な質疑討論がなされた。この分野の中で日本人研究者による発表は25演題 (15%) で、前回の IADR Brisbane 大会の同分野における日本人研究者による発表数41演題 (32%) に比較すると、日本人の発表数は少なく、会場においてもそれを実感した。

Prosthodontics Research セッションでは、実験的研究、インプラントをはじめとして、補綴材料や支台築造、固定性補綴物、義歯に関する研究など、基礎的研究から臨床に直結するものまで多種多様な内容が見られた。中でも興味を抱いた演題は、フランスの Bolla らによる「Influence of Elastic Modulus of Posts on Stress Distribution」だ。根管治療が施された失活歯に対する支台築造法として、ステンレス、チタン、ゴールド、カーボンファイバーポストの4種を用い、荷重を3方向 (歯軸方向、歯軸に対し45° または30° の方向) から付与し、三次元有限要素法を用いて根管内の応力分布を解析するという研究発表で、荷重方向を変えることにより応力の分布状態に変化をもたらし、いずれの荷重下においてもカーボンファイバーポストを用いた支台築造が優れる、と報告していた。自分の演題「Photoelastic Stress Analysis in Different Types of Posts and Cores」を含め、Post Crowns : Laboratory Studies の分野ではファイバーポストに関連した発表がほとんどで、ファイバーポストが現在国際的にも注目される材料のひとつであり、今後もさらなる研究が必要であることを実感した。

今回2度目の IADR 参加であったが、前回同様、学会規模の大きさに驚かされた。私のポスター掲示は午前のみであったが、数多くの質問や意見を頂き、有意義なセッションを行うことができた。今回受けた刺激を活力にして日々の研究に専念し、またいつか IADR で発表したいと思った。

17. Seq#104-Crowns: Laboratory Based Research

平 曜輔

(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科歯美補綴学分野)

学会会場となった Ernest N. Morial コンベンションセンターは、ジャズの似合うニューオーリンズ一番の繁華街、フレンチクォーターのすぐそばであった。ミシシッピ川に沿う横長の建物で、1階には12室もの大ホールが並んでいた。学会は4日間行われ、全演題数は約3000、Prosthodontic Research は176題で、そのうちの13題が2日目に開催されたポスターセッション Crowns: Laboratory Based Research であった。このセッションだけでもドイツ、エジプト、アメリカ、日本、台湾、サウジアラビア、ブラジルの7ヶ国、すなわち世界中からエントリーされていたと言ってもいいであろう。各演題をごく簡単に紹介してみたい。「オールセラミックシステムと口腔内セラミック補修材料の接着強さ」では、CoJet-System による補修が高い接着強さを示した。「加熱加圧成形セラミックの接着強さに対する表面処理の効果」では、IPS Empress に対して9.5%フッ酸処理が効果的とされた。「磨耗した試作セラミックと人歯エナメル質の表面粗さ」では、エナメル質に近い表面粗さを示すセラミックが試作されていた。私が発表した「繊維強化型コンポジットレジン接着強さ」では、新しく開発された歯冠修復用材料に対するサンドブラスト処理の有効性を報告した。「粘度の異なる印象材の親水性と流動性」では、試作印象材の高い印象精度が示された。「ビニルポリシロキサン印象材に対する接着材の接着強さ比較」では、Kerr の接着材が比較的強く接着していた。「クラウンを装着したヒト臼歯の接着性築造材料に関する研究」では、ポストのない築造窩洞が提案された。「3種類のセラミックベニアとセメント厚さの関係」では、支台歯形態は窓型で、セメント厚さは25 μ m が推奨された。「CAD/CAM ジルコニウム製コーピング辺縁の垂直間隙」では、9種類のセラミック中、3M ESPE Lava の適合性が最も良かった。「RelyX Unicem とセラミックの引っ張り接着強さ」では、Procera よりも Empress I の接着強さが高かった。「新規セラミック材料の強度と耐荷性能」では、zirCAD の優れた機械的性質が示された。「加熱加圧成形セラミックに対するリン酸溶液の影響」では、IPS Empress の接着に対して60%リン酸処理の効果が認められた。「焼成陶材表面の細菌コロニーのSEM観察」では、口腔内で形成されるコロニー数は3種類のセラミックの間で有意差を認めなかった。以上の演題をキーワードでみると、最も多いのはセラミックの9題、

次いで接着が6題であった。ポスター会場は全演題を2分するように中央にテーブルと椅子が設置されており、ディスカッションの時間以外でもじっくり情報交換できた。私は8年前に留学していた大学の教授2人とここで再会できたことがとても嬉しく、遠い旅の疲れもどこかへ吹っ飛んでしまった。

IV. 第55回国際歯科研究学会日本部会 (JADR)総会・学術大会開催のご案内

大会長 前田 伸子

(鶴見大学歯学部口腔細菌学教室)

会員の皆様には益々御活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、2007年度(平成19年度)のJADR総会・学術大会の第2報をお送りいたします。今回の大会は、「口腔と全身の健康を守るための新戦略」をメインテーマに掲げ、いまだに問題を抱える、あるいは、その詳細が明らかになっていない歯科領域に焦点を当て、関係各位のご協力によりまして、それぞれの分野で最先端の研究に取り組んでおられるspeakerに特別講演、ランチョンセミナー、シンポジウムなどをお願いしております。また、IADR会長Dr. Deborah Greenspanをはじめとしてアメリカ、ドイツ、オーストラリア、韓国および台湾から、各国のトップレベルの研究者をお招きし、今まで以上に国際的な雰囲気盛り上げるべく計画いたしました。つきましては、できるだけ多くの先生方にご参加いただき、盛大な会になりますよう皆様方のご協力をお願い申し上げます。

会 期：2007年11月17日(土)、18日(日)

会 場：鶴見大学記念館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3

懇親会：2007年11月17日(土)午後6時30分よりパンパシフィックホテル横浜

事前参加申込締切：2007年10月1日(月)

参加費：会員(事前登録, 10月1日(月)締切)	：¥5,000
会員(当日登録, 10月2日(火)以降)	：¥7,000
臨時会員(事前登録, 10月1日(月)締切)	：¥7,000
臨時会員(当日登録, 10月2日(火)以降)	：¥9,000
*学生・大学院生・留学生	：¥2,000
会員懇親会(事前申込, 10月1日(月)締切)	：¥8,000
会員懇親会(当日申込, 10月2日(火)以降)	：¥10,000

大会長：前田伸子(鶴見大学歯学部口腔細菌学教室)

準備委員長：平下斐雄(鶴見大学歯学部矯正学講座)

大会事務局：永坂 哲(鶴見大学歯学部矯正学講座)

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3鶴見大学歯学部

Fax：045-572-3516 E-mail：nagasaka-s@tsurumi-u.ac.jp

内 容：特別講演、シンポジウム、ランチョンセミナー、一般口演、ポスターセッション、JADR市民公開シンポジウム、JADR共催新ハイテクリサーチセンター公開シンポジウム、展示、その他

特別講演およびシンポジウム：

○特別講演

「口腔粘膜疾患への対処について」

“The Management of Oral Mucosal Disease”

IADR会長 Dr. Deborah Greenspan

「デンタルインプラントの安定性の評価について」

“Measurement of Dental Implant Stability”

Dr. In-Ho Cho (檀国大学)

「バイオニック医学は21世紀の医療に革命をもたらす」

“Bionic medicine revolutionizes clinical treatment in the 21st century”

砂川賢二 教授 (九州大学)

○シンポジウム

「初期う蝕とホームケアツールとしての特定保健用食品」

“Early Caries and FOSHU as home care tool”

Moderator：今井 奨 教授(松本歯科大学, 国立保健院)

Potential speakers：Dr. Eric. C. Reynolds (メルボルン大学)

花田信弘 教授(九州大学, 国立保健院)

飯島洋一 准教授(長崎大学)

「レジン系修復材と象牙質再生：協調か敵対か？」

“Dentin regeneration and resin restoratives? Partnership or hostility”

Moderator：今里 聡 准教授(大阪大学)

Potential speakers：Dr. Gottfried Schmalz (レーゲンスブルグ大学)

斎藤隆史 教授(北海道医療大学)

北村知昭 准教授(九州歯科大学)

今里 聡 准教授(大阪大学)

「シェーグレン症候群研究の最前線」

“Recent advances in Sjögren's syndrome”

Moderator：斎藤一郎 教授(鶴見大学)

Potential speakers：Dr. John Greenspan (カリフォルニア大学)

Dr. Seunghee Cha (フロリダ大学)

菅井 進 名誉教授(金沢医科大学)

斎藤一郎 教授(鶴見大学)

「口腔細菌と敗血症」

“Oral bacteria and sepsis”

Moderator：奥田克爾 教授(東京歯科大学),

坂本春生 准教授(東海大学)

Potential speakers：Dr. Yuh-Yih Lin (中山医科大学)

島津岳士 准教授(大阪大学)

石原和幸 准教授(東京歯科大学)

坂本春生 准教授(東海大学)

○ランチョンセミナー

「バイオメディカル研究の黄金時代：研究室から社会へ」

"The Golden Era of Biomedical Research: From Laboratory to Society."

Dr. Harold C. Slavkin (南カリフォルニア大学)

「抗菌ペプチドの歯科臨床応用の可能性について」

"Antimicrobial Peptides for Plaque Control"

Dr. Kai P. Leung (アメリカ軍歯科・外傷研究部門)

「口腔内の微生物生態系」

"Microbial ecosystem in the oral cavity"

Dr. John Dawson Ruby (アラバマ大学)

高橋信博 教授 (東北大学)

JADR Travel Award受賞者講演

○市民公開シンポジウム

「子どもの立場で考える健康づくり」

Moderator: 平下斐雄 教授 (鶴見大学),

朝田芳信 教授 (鶴見大学)

Potential speakers: 仙田 満 教授 (環境デザイン研究所所長, 放送大学)

塚原典子 准教授 (新潟医療福祉大学)

朝田芳信 教授 (鶴見大学)

○JADR共催新ハイテクリサーチセンター公開シンポジウム

「ひとりひとりの顎と体にやさしい歯の補綴と噛み合わせ

—顎口腔領域の運動を再現するシミュレーションロボットの開発—

Moderator: 川崎堅三 教授 (鶴見大学)

V. 第56回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内

大会長 中垣 晴男

(愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座)

会期: 2008年11月29日(土), 30日(日)

会場: 愛知学院大学歯学部

(法人本部講堂・歯学部基礎教育研究棟・短大歯科衛生学科)

〒464-8650 名古屋市千種区楠元町1-100

大会長: 中垣晴男 (愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座)

準備委員長: 加藤一夫 (愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座)

大会事務局: 愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座内

TEL: 052-751-2561 (内線1352)

FAX: 052-752-5988

詳細は、JADRホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/>)にてお知らせいたします。

VI. IADR会費の値上げについて

2008年度より、IADR会費が値上げされます。これまでIADR理事会で国ごとに会費を設定しておりましたが、World Bankで発表されている世界各国の平均年収表にもとづき、下記のとおり年会費の金額が改定されました。

Lower Middle Income or below 国在住者 US \$ 40

Upper Income 国在住者 US \$ 50

High Income 国在住者 US \$ 80

日本は High Income の国にあたるため、2008年度よりIADR会費は US \$ 80となります。なお、JADR会費につきましては従来通り US \$ 50のままで変更ございません。会員各位には誠に勝手なお願いで恐縮ですが、何卒ご理解いただけますようお願い申し上げます。本件に関しましては、IADRより2008年度年会費納入通知が届くことと存じますので、あらかじめご了承ください。

VII. IADR John J. Clarkson Fellowship 募集案内

IADR本部では、2008年度IADR John Clarkson Fellowshipを募集しております。本 Fellowship は1990~1997年よりIADR/AADRの常任理事を務められました John Clarkson 博士の功績を称えて創設された助成となっており、対象は Public Dental Health 分野のポスドク (DDS, MS, PhDのいずれかの保持者) となっております。内定者へは、国外の研究活動に従事するための滞在費用として最高US\$ 15,000の助成が付与されます。申込締切は2007年10月15日(月)となっております。ご関心をお持ちの先生方はふるってご応募ください。詳細は、IADRホームページ (<http://www.iadr.com/awards/clarkson.html>) をご覧ください。

VIII. 第5回IADR-Jordan-section 学術大会開催のご案内

IADR-Jordan sectionより学術大会のご案内が届いております。ご関心をお持ちの方は下記ホームページをご覧ください。

日時: 2008年4月24日(木)~26日(土)

場所: ヨルダン大学 (Irbid市)

大会長: Prof. Anwar Bataineh

演題募集期間: 2007年9月1日(土)~2008年1月24日(木)

事前参加申込締切: 2008年2月8日(金)

大会ホームページ: <http://www.just.edu.jo/FIDC>

CONTENTS

I. IADRの国際活動の促進強化	1	I. Global promotion of the IADR activity	1
II. IADR本部役員の任期を終えて	2	Dr. Yutaka Oda: JADR President	
III. 第85回IADR New Orleans総会報告	4	II. Retirement from IADR officer - Thank you for your support -	
1. The IADR/Unilever Hatton Awards 1st prize (Senior Basic Research) を受賞して	4	Dr. Takayuki Kuroda: Honorary Member of JADR, A Professor Emeritus of Tokyo Med. Dent. Univ.	2
2. Unilever Hatton Awards CompetitionのJunior 部門に参加して	5	III. Reports of the 85th IADR General Session in New Orleans	4
3. IADR/Colgate Research in Prevention Travel Awardを受賞して	6	1. The IADR/Unilever Hatton Awards 1st prize (Senior Basic Research)	
4. Arthur R. Frechette Research Award Competition 1st prizeを受賞して	6	Dr. Shigeyuki Ozawa: Kanagawa Dental College	4
5. Pre-prosthetic Regenerative Science Awardを受賞して	7	2. The IADR/Unilever Hatton Awards Competition	
6. 第85回IADR学会報告	8	Dr. Hitoshi Watanabe: Tsurumi Univ.	5
7. Dental Materials - Ceramics & Cements	8	3. IADR/Colgate Research in Prevention Travel Award	
8. Dental Materials	9	Dr. Michiko Makino: Kyushu Dental College	6
9. Salivary Research	9	4. Arthur R. Frechette Research Award Competition	
10. Cariology Research	10	Dr. Hidenori Kurata: Hokkaido Univ.	6
11. Cariology and Periodontology	10	5. Pre-prosthetic Regenerative Science Award	
12. Microbiology/Immunology and Infection Control	11	Dr. Naoki Tsukimura: The Weintraub Center for Reconstructive Biotechnology UCLA School of Dentistry	7
13. Microbiology/Immunology and Infection Control	11	6. Reports of the 85th IADR General Session in New Orleans	
14. Mineralized Tissue Research	12	Dr. Naoto Suda: Tokyo Med. Dent. Univ.	8
15. Prosthodontics Research	12	7. Dental Materials, Ceramics & Cements	
16. Prosthodontics Research	13	Dr. Keiichi Yoshida: Nagasaki Univ.	8
17. Seq#104-Crowns: Laboratory Based Research	13	8. Dental Materials	
IV. 第55回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内	14	Dr. Shinji Takemoto: Tokyo Dental College	9
V. 第56回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会開催のご案内	15	9. Salivary Research	
VI. IADR会費の値上げについて	15	Dr. Kenji Uchihashi: Osaka Dental College	9
VII. IADR John J. Clarkson Fellowship募集のご案内	15	10. Cariology Research	
VIII. 第5回IADR-Jordan-section 学術大会開催のご案内	15	Dr. Yoshiaki Nomura, Dr. Nobuhiro Hanada: National Institute of Public Health	10
		11. Cariology and Periodontology	
		Dr. Daisuke Inaba: Iwate Medical College	10
		12. Microbiology/Immunology and Infection Control	
		Dr. Hidenobu Senpuku: National Institute of Infectious Diseases	11
		13. Microbiology/Immunology and Infection Control	
		Dr. Takahiro Arai: Tokyo Dental College	11
		14. Mineralized Tissue Research	
		Dr. Yukiko Nakano: McGill Univ.	12
		15. Prosthodontics Research	
		Dr. Toru Ogawa: Tohoku Univ.	12
		16. Prosthodontics Research	
		Dr. Masahiro Yamamoto: Tokyo Med. Dent. Univ.	13
		17. Seq#104-Crowns: Laboratory Based Research	
		Dr. Yosuke Taira: Nagasaki Univ.	13
		IV. Announcement of the 55th JADR Academic Meeting	
		Dr. Nobuko Maeda: The Chairman of the 55th JADR Academic Meeting	14
		V. Announcement of the 56th JADR Academic Meeting	
		Dr. Haruo Nakagaki: The Chairman of the 56th JADR Academic Meeting	15
		VI. Raise of IADR Annual Due	15
		VII. Enrollment of IADR John J. Clarkson Fellowship	15
		VIII. Announcement of the 5th Academic Meeting of IADR-Jordan section	15

●編集後記●

本号は3月に行われた第85回IADR New Orleans大会の報告を中心に構成しました。幸いにも、2005～2006年にIADR会長を務められ、先のNew Orleans大会総会で本部役員としての長年の大任を終えられた黒田敬之先生から情報満載の特別寄稿をいただくことができました、とても充実した内容になったと喜んでおります。

また、今年はIADR大会報告の募集案内が遅れたため、記事が集まるかどうか不安だったのですが、JADR会員の受賞報告だけでもかなりのスペースを割く必要が出るなど、嬉しい誤算もありました。今後この傾向が更に進んで、黒田元会長にご心配いただくことなくとも良い状況となるよう、JADRの若手の更なる活躍に期待したいものです。

本号がお手許に届くのは、そろそろ第55回JADR総会・学術大会（前田伸子大会長・於鶴見大学）の準備が進んでいる頃かと思えます。次号はそのJADR大会の報告を中心としたものになります。皆様のご寄稿をお待ちしております。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先：〒612-8082 京都市伏見区両替町2-348-302

アカデミック・スクエア (株) 内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR副会長 高野吉郎 (東京医科歯科大学大学院硬組織構造生物学分野)

連絡先：〒113-8549 東京都文京区湯島1-5-45 FAX: 03-5803-5439

2007年9月1日 発行